宍粟郷土会報
No. 34
44. 9. 1
兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
宍粟郷土研究会
電話②2000

小笠原忠脩・飯綱の鎧

黒田義隆

(一)

慶長十九年（一六一四年）十月中ごろ江戸幕府からの命令書が信州松本城の小笠原秀政のもとにきた。それによると前将軍徳川家康と将軍秀忠は、大坂城に向って出陣するので、信濃守忠脩はすみやかに兵を率いて参会せよ。兵部大輔秀政は居城に留まって警備を厳にして東山道を監視せよ、とあった。前将軍家康は十月一日大坂征討を発令して十一日に駿府を出発し、秀忠も同月二十三日に江戸を出発するのであった。忠脩は小笠原秀政の長男で、当時松本城主の地位にあった。

忠脩はただちに出陣の用意をととのえた。老臣犬甘半左ェ門久知、小笠原隼人政直、犬甘外記久信、島立内膳貞正を士大将とし、総武者二百五十騎、歩卒三千余人を率いて十月下旬に出発して大坂に向い、家康の指揮下に入り、河内国砂村に屯営して命を待った。十二月二十日東西両軍の間に和議が成立し、戦闘には至らないで元和元年正月忠脩の軍は松本に帰還した。

ところが三月になると、大坂方が再挙を画っているという情報が駿府の家康のもとに届いた。四月六日家康は大坂征討を発令した。小笠原氏に対しては今度は父兵部大輔秀政に出陣を命じ、忠脩には在城警備を命じた。秀政はただちに軍勢の部署を定めた。士大将には家老二木勘右衛門政成（千三百石）、小笠原主水政信（千石）、春日淡路道次（千石）の三人を命じ、総武者数二百七十騎でその中には松本近在の郷士十三人、箕輪の郷士十七

目次

小笠原忠脩・飯綱の鎧……黒田義隆……1
たたら連想抄……島下八重子……6
旧安志藩主小笠原家と諏訪法性の兜について……中村潔……8
播磨国皮多村文書刊行……11
鳥取方面見学旅行記……12
雑報……12
会員名簿(27)……12

人も参加した。歩卒は三千余人で四月十一日に松本を出発した。

留守居を命ぜられた忠脩は再三急使を江戸に走らせて従軍を懇願したが将軍（秀忠）の許可を得られなかった。今度の戦いに出なければ今後再び戦争の起ることはあるまいと考えると、矢も楯もたまらなくなり、ひそかに出陣を決意し、家老犬甘半左エ門久知、二木八右エ門重次の二家老に騎士六十人を添えて居城に留守をさせ、父秀政より五日おくれて四月十六日に家老小笠原隼人政直、島立内膳貞正以下兵若干を率いで松本を出発して大阪に向った。忠脩の弟忠真も自分の家来赤坂左エ門盛昌以下渋田見縫殿助盛直らを率いて同じく大阪に向って出発した。四月二十日秀政は伏見に到着した。忠脩と忠真も亦この日ここに到着し秀政と同じ営舎に入った。

家康は四月十八日京に着いて二条城に入り、秀忠は二十一日に伏見城に着いた。秀政は二人に拝謁したが、秀忠は忠脩に対して許さなかった。秀忠は心中ではひそかに忠脩の忠勇に感じていたが、命令に違背したので表向きは怒って出任させなかったのであった。父秀政は本多正信に、忠脩の推参したことは、自分は全く関知しない所で驚いている次第であると陳謝した。家康は忠脩の着陣を聞いて二条城に召したが、秀忠の怒りに対する謹慎の態度をとって日が暮れてから登城謁見した。この日は陰暦四月二十二日で太陽暦に換算すると六月十八日に当るが、この夜は意外によく冷えて七十四才の家康は炬燵をかかえてあたっていた。忠脩を近く召して、長鮑を与へて「血気盛りのことだからこんな時、若い者は軍法を犯してもよいぞ。」となぐさめた。忠脩はこの一言でほっとしたことであろう。これで軍令違反は許されたわけである。家康がさらに弟の大学助（忠真）のことを聞いたので、忠真も今度出陣した旨を答えると、家康は嬉しそうな顔をしたので、「今夜ここへ連れてきます。」というと、すぐにここへ、と召した。家康は忠政にも長鮑を与えてよく参った。いつのまにか大男になったなアとなつかしげに見た。

秀政・忠脩・忠真の三人は、伏見から淀、河内飯森をへて五月四日大和川を前にして陣をしいた。翌五日将軍秀忠から命令があり、五将は各々軍奉行の指揮に従ってみだりに行動してはならない。とあった、五将というのは榊原康勝（上州館林十万五千石）、保科正光（三万石、信州高遠）諏訪頼水（二万七千石、信州諏訪）、仙石忠政（五万石、信州小諸）、と小笠原秀政の五人で、軍奉行は、藤田重信（一万五千石、野州西方城主）であった。また、五将は阿倍野の敵と戦うことを命ぜられたので家

来にその地形を偵察させた。

六日の早朝大阪城の木村重成軍の一隊が秀政軍の前方に出てきたのでこれを討とうとしたが軍奉行の藤田氏がこれを押えて撃たせなかった。そのため秀忠から詰問された小笠原秀政は武名を傷つけられたと残念がった。明くる七日は将軍から旗本の先手となって戦うように命ぜられた、巳の刻に越前兵本多忠朝の隊から大阪市の真田隊、毛利隊に銃火の攻撃を開始した。秀政は全軍攻撃を令し、先頭切って進み乱戦の中に傷ついて久宝寺村の本営に帰って戦傷死し、忠脩も乱戦中に戦死した。本多忠朝も戦死した。忠真も七ヶ所の重傷を負つた。小笠原勢の戦死者は四十一人あった。秀政と忠脩の遺骸はともに翌五月八日京都七条で火葬にし、遺骨はたゞちに信州に帰った。葬儀は重傷を負った忠信の松本帰城をまって八月七日に行なわれ、忠脩の遺骨は法性寺に葬られた。法号は法性寺殿正甫宗中大居士と称した。

これはかねて在世中に定めておいたものであった。

法性寺は松本城の東南一里ばかりの浅間村にあって、その前年（慶長十九年）に忠脩が建立した寺院である。法性寺は寛永九年八月忠脩の嗣子長次が播州竜野から二万石増の八万石で豊前中津に国替えののち、その城下に建立されたが、七世後の長興が播州安志に改封後、さらにその城下に移された。

忠脩の名は二代将軍秀忠が慶長十一年二月十三才のとき江戸城でみずから首服を加へて名の一字を与えて忠脩と命名した。

忠脩はすこぶる美男で性質は温良で、才智がすぐれていた。大阪の陣で忠脩が軍勢を率いて京の町を通ると、京の人が大勢行列して見ていたが、あんなよい男は戦死させたらあかんとささやき合う声が家来の耳に入ったという。ところが庶民の願望もむなしく、天王子口で戦死してしまった。

忠脩は慶長十五年十七才のとき本多忠政の女と結婚して長女繁姫を挙げ（繁姫は蜂須賀氏に嫁す）、戦死後、十八日目に夫人は松本城で男子を出産したので父祖の幼名をついで幸松丸（後の長次）と名付けられた。小笠原父子の戦死によって、家康は忠真に松本八万石を襲ぐことを命じた。さらに忠真は家康の命によって兄忠脩の未亡人と結婚した。幸松丸は叔父忠真によって育て

山崎町花選定記念　新発売
登録銘菓
さつき

さつき本舗　荒木菓子舗
播州山崎町

られた。

（二）

信州一宮諏訪神社は古く諏訪南宮法性大明神と称し、武田信玄は、はなはだこれを崇敬したが、法性というとすぐに連想されるのは浄瑠璃「本朝二十四孝」に八重垣姫が諏訪明神から拝載した諏訪法性兜である。諏訪上社の旧神長官守矢家には諏訪法性兜が伝来していて、鉢の内側に「文永五年八月明珍位貞作」と刻まれており（諏訪資料叢書巻二十九）白い毛がフサフサとついていて、二十四孝の湖水渡りの段の兜とそっくりである。また私の見た明珍家系図には鎌倉時代の人はみな宗の字がついていて、文永ころの人で貞の字のつく人は見当らないのであった。

宍粟郡安富町安志に加茂神社がある。寿永三年（一一八四年）源頼朝が京の賀茂別雷神社（上賀茂）に寄進した神領中に播磨国　安志庄、林田庄（揖保郡）室塩屋御厨（揖保郡）とあって、当社は安志庄の庄園鎮守社であったと考えられる由緒ある神社で、小笠原家の入部以来、藩の崇敬社であった。この加茂神社の宝物目録中に

飯綱鎧　一領
諏訪法性兜　一具

がある。鎧は「小笠原俣重宝」とあって、いつの時代にか小笠原家から奉納されたものであることが考えられる。

わたしはかって同社の竹村貞氏（故人）に諏訪法性兜について尋ねてみたことがあるが、箱を開けると「火事がいく」といって固く禁せられているとのことであったように思う。また、いづなの鎧というのがあって、その鎧の胸の所に狐が付いていて、その狐の顔が見る時によって、左を向いていたり、右を向いていたりしているという。甚だ興味をそそる話であった。

ところが小笠原家の家老であった犬甘家の人々の伝承を集めた「犬甘代々古老夜話集」によると、次のようなちょっと怪異めいた話がみえる。

小笠原長次が立野（竜野）の城主のとき（十七才のときとあるから竜野へきて数年後のこととなる）鷹狩に出かけ家来とはなれて山の周りをまわっている時、一人の山伏と出会った。その山伏の申すには、私は鏡を持って

いて、数年来誰れぞに譲りたいと考えていましたが、まだこれぞという人に出会いませんが、今あなたにお譲りします。随分大切にされましたら武運長久、お家が繁栄しますといって鏡を長次に譲って立去った。長次が後を追いかけて礼を言おうとしたが、山伏の姿はもうその辺に見えなかった。長次を探しに来た家来たちに尋ねてもそんな山伏には出合わなかったという。

さらに、同書には伊津奈の御具足について、右御具足は惣しぶ革包み、さめかわに塗り、花色の糸で素掛けである。御胸板に右の鏡をお入れになった。鏡の内には天狗の如き者が狐に乗っている像が彫付けてある。甲は白鶏の置物である。さあって、山伏のくれた鏡には、天狗らしい者が狐に乗っているという随分異様な図柄が毛彫りされていたらしい。

私は竹村氏がいった狐というのはこのことだと直感した。同氏も多分実際には見ていなくて言い伝えをそのまま教えてくれたのだろうと思うが、その話のキツネというのは、鏡の中のキツネをさしているのではないかと考えた。

世に飯綱の法と称する妖術がある。狐を使う呪術である。その起原は鎌倉時代の天福元年（一二三三年）に信州の人、伊藤忠縄が同国飯縄山に登って行を修め、神通力を得たのが起りだという。伝説であろう。その鏡をくれた山伏も飯綱の呪術の遣い手ではなかったかと思う。

小笠原氏は新羅三郎義光の流れをくむ甲斐源氏でその遠祖長清が甲州の小笠原（現甲府市）に館していたことから小笠原氏を称したという。故実の家で、頼朝の有名な富士の巻狩にも参加したであろうとされている。小笠原氏は北信の松本（深志）に城していたが、秀政の時は南信の伊那飯田にいたこともある。いつの時代にか諏訪明神の法性兜が小笠原家の有となったのであろう。甲冑研究家の山上八郎氏の説明では守矢家の法性兜は本朝二十四孝の浄瑠璃ができてから後に作られたものであろうとのことであった。（昭和八年ころ調査された）

慶長十七年三月十一日忠脩が十九歳のとき、父秀政はこれに糾方的伝を伝授した。この時忠脩は弟の忠真にも今日相伝してやってほしいと希望すると、秀政は、この伝は古来、代々嫡子一人に限ると、聞入れなかったが、九代前の長基が長男長秀と次男政康とへ同時に的伝した例を上げて懇願したので、つい忠真も同じ日に之を受けた。この一事によっても忠脩は、弟思いの心のやさしい兄であったようである。

忠真は次男であるから松本時代には兄忠脩夫妻は本丸に住み、自分は二千石を貰って父秀政と二の丸に住んでいた。それが夏の陣で父兄が戦死して一躍松本八万石の、ついで明石十万石の城主となったことを心苦しく思い、

各種自転車販売
竹内モータース
山崎町山田町・電話②〇四二五

自分を可愛がってくれた亡兄の遺児幸松丸が小笠原家の嫡孫であるので、早くこの甥を生長させて領地を譲りたいと考え、小笠原修理と丸山将監をその養育係とし、十歳になるのを待って元服させて長次と名乗らせ、寛永元年八月江戸に出府させ、将軍家光に目通りがかなえば続いて領地を譲る決心で老中に願いでた。しかし中々その機会が来なかった。寛永三年七月忠真は将軍の上洛に供奉し、長次も将軍の命をうけて上京した。後水尾天皇の二条城行幸が滞りなくすんだので将軍家光は忠真、長次の二人を召し、長次に竜野六万石を与え、忠真の明石十万石は従前通りときめられた。

長次が一城の主となったのを最も喜んだ一人は何といっても明石城主小笠原忠真夫人となっている長次の実母であり、忠真は勿論、姫路城主で外祖父にあたる本多忠政であり、忠脩の家来たちであったであろう。

忠真は長次の父忠脩の老臣であった犬甘半左衛門、小笠原隼人らをはじめ、譜代の士の嫡流の者、名誉のあった者らを選んで長次の家来とした。祖先伝来の刀剣武具什器文書等の家宝を半分以上も譲って多年の宿願を果たした。寛永八年長次十六歳のとき岸和田城主松平康重の女と結婚した。

大阪夏の陣の後、元和三年七月二十二歳の小笠原忠真は岳父本多忠政の姫路城の後衛的性格で明石城に封ぜられた。十五年後の寛永九年（一六三二）には忠真は九州警備の最高責任者、鎮西探題として豊前小倉十五万に封ぜられ、同族長次は豊前中津八万石に、忠真弟忠和は豊後杵築四万石に、同弟重直は豊前竜王三万七千石に封ぜられ、すべて忠真の指揮下におかれた。小笠原一族の領地を合わせれば三十万七千石の大大名であった。

その後、故あって中津小笠原家は一万石をもって播磨安志に封ぜられたのは、皆さんご承知のところである。

たたら連想抄

島下八重子

宍粟は踏鞴跡が多いという。青い山中で精練された鉄が、どんな運命をたどったことであろうと思いみる時、興が深い。農機具となって多くの人に日々の糧をもたら

したものもあるだろうし、応器となりて托鉢の僧の手に捧げ持たれ経の沁みたものもあろう。又名工の手を経て水もしたたる刀剣となり高貴の家の床の間に飾られたものもあるだろうし、山刀となりて丁々と樹を伐る音を冴えさせたものもあるだろう。

私の義弟の父は土左藩士の落胤、今大阪の桜の名所になっている土佐稲荷神社の近くの傘屋の娘が母である。問口の広い大きな傘問屋が戦災前まであったから、いずれ土佐の紙などを多量に仕入れるか何かの縁で、恋仲となったものであろう。武士と町人の娘では生涯を共にすることは出来ず、祖父の形見はこれだけと或日義弟が見せてくれたものは、一振りの刀であった。脇差だったらしくあまり長くはなかったが、鍔の細工が何とものどやかな田植風景だった。百姓の蓑笠が象嵌で浮いているのも、米どころ土佐の侍の心やりのようで微笑ましかった。又私のおぼろな記憶に、正則と銘のある銹びた小刀を、なた代りに使っていたことがあるので、ふと思い出して山崎の姉に尋ねてみたところ、柴をたくこともない今はもう何処にあるやら判らぬとのこと、代りに面白い匕首のあることを知らせてくれた。この頃は映画でもやくざものが流行だが、山崎のような人柄のいゝ町でも、明治の頃には親分が居ったらしい。荒鹿広造といったそうな。私が長姉から聞いたところでは、朝日座の敷地造成の時崖くずれがあって、人夫を指揮していた彼が大怪我をしそれが原因で死亡したということだったが、次姉のたよりはもっとドライで、

どうせばくち場のもつれからだったのでしょう。戎神社の境内でやりあって死んだのだそうです。槍の穂先きを作り直した匕首ですが、私達の父が出征するとき、荒廉の妻だった人が餞別にくれたのだそうで、今もうちにあります。毎年新宮から無花果を届けてくれた出合のおせいさんは広造の娘で、父と荒廉の妻は縁続きだったそうです。

と書かれてあった。戸板に乗せられて運び込まれた夫に、晒布を割いてきびきび手当てをしたなどとひどく女傑めいた人のように長姉が語ったこともあったが、明治の女は身寄りの若者が生きて捕虜になることを恐れたのであろうか、銃剣も持たされるのに匕首を渡したところが面白い。

刺しも刺されもせず、父は大腿部に貫通銃創を負って帰還したから、匕首の由来を聞けばとて、先ずは気が軽い。それよりも、文字通り、「玉石共に砕く」で、第二次大戦の業火を浴びて、名工の遺品であたら鈍刀になり果てたものも多かろうと、心が重くなるのはどうしたことであろう。今日的な用のないものながら、兇器が減ってよかったと思い切れぬところ、われながら浅ましいが

重い胃痛に・胃弱い人に
新 三共胃腸薬
三共株式会社
最寄りの薬店でお求め下さい

古風な踏鞴が源と思うが故に、いくつもいくつも人の手が加わったことへの哀惜なのであろう。

公害などという言葉もなく、青嵐に入り交って流れたであろう薪の煙ののどけさの偲ばれる今日此頃である。

旧安志藩主小笠原家と「諏訪法性」の兜(かぶと)について

中村 潔

はじめに

「諏訪法性」とは、戦国時代の智将であり、勇将であった武田信玄の別称であります。最近の映画「風林火山」で、この信玄のお株が著しく上り、又一方目下進行中のNHKテレビの「天と地」では、信玄の好敵手であった上杉謙信の名が、その出生の地越後始め信濃地方に一大観光ブームを巻き起していると云う際、この両雄の中の一人である武田信玄の兜が、安富町の氏神、加茂神社に秘蔵されて居ることを紹介させていたゞきます。

この兜の非公開のこと

その兜は「諏訪法性の兜」と称せられ、当地の旧藩主小笠原家の藩祖五人の英霊を奉祀する「五霊神社」に合祀されて居ました。私達も幼時から、そのことをよく聞かされ、

「この扉を開けば目がつぶれるとか」

「領内に大火が起きるとか」

云われて、神官以外全く非公開で、その詳細を知る由なく、既に明治維新以後百年の才月を経して来ました。

前記「五霊神社」は小笠原氏の祖

小笠原貞宗
同　長時
同　貞慶
同　秀政ー大阪夏の陣で戦死
同　忠脩ー大阪冬の陣で戦死

の五霊を祀り、祭礼は毎年四月の三日で、昭和の始め頃迄は、祭礼の行事として、当地在住の旧士族の人々によって、旧幕時代の服装の裃姿で、弓術や加茂神社の馬場で乗馬による打球等が取り行なわれて居た。

さて上述の兜は、今尚非公開で、秘蔵のベールを被ったまゝであります。

現在の竹村宮司さんにお伺いすると、古文化財の重要

視される今日、やがていつかはこの兜も、日の目を見ねばならぬ時が来るでしょう。とのお話。筆者も強くそのことを熱望しておいた次第です。

因みに五霊神社は、元は現在の安富中学南の電機工場の位置に有ったのですが、大正年代から加茂神社境内の神池の東の稲荷丘に、移祀されて居ます。

この兜と小笠原家

この武田信玄の兜が、どうした経路で小笠原家に移ったか、今日その詳細を知るよすがもありませんが、小笠原家が、信濃守のその名そのまゝ、久しく信濃を本拠とした名門の豪族で、信濃国内の飯田、松本、上田等の居城を転々した四十万石の大身だった。

それより少し以前に、信濃の国の隣国である甲斐の武田信玄は、次第に勢いを得て強大となり、着々と四隣を征伏し版図を拡め、遂には天下に覇を唱えんものと西進し、京の都目ざして波濤のように進撃して行った。

所が途中の織田、徳川にその進路を阻まれ、始めは、こんな小者達と見くびって、鎧袖一触の下に席捲せんものと予定し乍ら、案外手こずってしまって、戦は一進一退、膠着を余儀なくされ〜〜〜そうした間に信玄は、雄図空しく不幸陣中に病没してしまったことは、よく大方の御承知の所であります。かくて武田家は、その子勝頼の不運不敏に依り、次第に滅亡の道を辿って行ったのであります。

こうした時代に、信玄の愛用した兜の一個が、その隣国である信濃の国の太守である小笠原氏に移ったということは、容易に考えられる所であります。

信玄の兜と言っても、その所持して居ったのは無論一個ではなく、

儀礼用
出陣用
戦斗用

と数個は使い分けしていたものであろう。現在安志の加茂神社に残されているものは、その何れであろうか。

明治以降の小笠原家

広藩置県の際の小笠原家の当主は貞孚公であった。この方は明治になって、子爵を授けられ、暫く安志の光久寺にお住いでありました。そしてその旧藩邸は山崎や林田と同じく小学校と変った。

仕出し寿司 与志呂
山崎町山田町・電話②〇七六九

東芝ストア
井口電機
山崎町山田・TEL②0350

貞孚公はやがて、上京されて既に一足先きに上京されていた伯爵の九州小倉の小笠原家と共に、東京住居をされました。次いで貞孚氏に子がなく伯爵家の弟さんを養子とせられました。その人が長丕氏で、この方は英国留学、帰国後大学教授でした長丕氏は先年逝去され、引きつゞき後嗣の無い為、又今度も伯爵家から養子をされている。その方が現在の忠幸氏である。現在の安志加茂神社に参拝して、池の東に建立してある石碑は明治になってからの初代の子爵貞孚氏の碑であり、尚加茂神社手洗所の手前に寄進された大石柱弐本は二代目長丕氏のものであり、長丕氏は若い頃一度だけ帰郷の際加茂神社の社務所に宿泊されている。

この長丕氏と有名な小笠原長正氏（元海軍中将で、聖上の皇太子当時の東宮御学問所々長）とよく世間で間違えられ易いのですが、長正氏の方は九州唐津の殿様で、この人が前の小学校読本の中に載っている「水兵の母」の課の「ふと見た大尉がこれを見て、何をくよくよ泣いている」と叱った大尉であり、勿論安志の小笠原氏と姻戚の間柄であることを、当時の安志藩出身の先生から教わったことを思い出します。

安志藩については、尚色々と書かせていたゞき度いのですが、長くなりますので、次に附記としまして少しだけ記載いたします。

宍粟郡内の小笠原氏の旧領は左の通りです。

△安富町ー安志、三森、春、名坂、末広、枋原

△一の宮町及び山崎村ー田井、梯、母栖、須行名、市場、杉田、安積、西安積（半分）、野田（半分）能倉、東河内、塩田、葛根

小笠原氏が豊前（大分県）中津の三万石から一万石に落され、どうして安志へ移封になったかに就きましては結局、小笠原氏のそれ迄の経歴上、徳川譜代でもなく、と云って外様でもないような大名は、徳川幕府から迂散くさい部類と睨まれて居たわけでありまして、何か口実や機会のある毎に、減封移封等の取りこぼち策を被って来たのであります。

而して、この時には、当主となる小笠原長邑が年令十七才未満の故を以て没収廃絶とすべきを、やっと、その先祖の功績（大阪夏冬の陣の際の）あるによりと云うことで、その御位牌を守る料としての最低の一万石に格下

げられたのであった。その時安志へ来られた藩主は、前述の秀政の二男長興でありました。

尚又、その領地が元の神戸村附近が一番多いので、その居城（いや藩邸）を神戸とすべきであったと云います。所が、当時の、これも徳川の西播に於ける大名配置の基本方針として、

「西播の大名は何れも、川を東にして、その居城（又は藩邸）を構へよ。」

と云うことでありましたので、旧神戸村なればどこでも「川が西となる」と云うことで、やむなく安志の地を選んだと云うことであります。事実又、姫路は市川を東に竜野山崎は揖保川を東に、赤穂は千種川を、林田、三日月藩何れも同様であります。

これは、拙い筆者の考証で恐れ入りますが、「川を東にする。」と云うことは、万一西方の中国、九州の大名が徳川幕府に抗して攻め上って来る際、川を東にする西播の諸大名は、徳川の為に、自然に「背水の陣」の兵法を余儀されるよう平素から配置されていたのではないかと云うことであります。

最後に、安志藩の一万石は上記の宍粟郡内だけでは一万石に達しないので、元の赤穂、佐用両郡内の左記の土地も、その領分でありました。

△赤穂郡ー横尾、斧嶋、下須、小野原、能下、三徳山富満寺、大枝、新村、鍛治村、小坂、市原黒石、抜位、柏野、楠木、国見、大酒

△佐用郡ー櫛田（半分）、三尾、円光寺、仁位、早滋山田（半分）、中山、蔵垣内、西本郷、大垣内、皆田

この赤穂、佐用二郡にしましても、宍粟の領地にしましても、その領分は何れも今日の過疎地帯と云われる地方が大部分で、如何に晩年の小笠原家が徳川幕府から睨まれ、且つ冷遇されていたかゞよく解ると思います。而も幕末の長州征伐の際には、この力のない安志藩は、真先に出陣を命ぜられたのであります。

ー了ー

「播磨国皮多村文書」刊行

今般播磨国皮多村文書研究会編の前記書籍が、部落問題研究所から発行された。編輯者代表が山崎町稲田耕一

建具・フスマ
アルミサッシ
アルミ建具
製造販売
安 池田平一
山崎町山田町・電話②一〇二八

氏、A五版、クロース箱入、四八五頁、古文書集成で、大凡徳川初期より明治初年に至る近世の関係文書を原文のまま二段組に記載。宍粟郡では下比地文書七十一、島田七十五、西山十五、木谷野十一、長野六〇、大庄屋（庄）四点、揖保郡は、松原七、仙正四、神崎郡では、戸板二十六、真弓卜四点で外に生野代官卜四点ありて三百余点に及んでいる。この内には、田畑検地帳、宗門帳などの帳面類もふくまれており、この豊富な資料の刊行は部落研究開明に重大な役割を果すものと思われる。部落問題研究所員、大阪大学文学部助教授の脇田修氏の懇切な解説を巻末に附加されている。

鳥取方面見学旅行

本会春季旅行は、五月十八日好天に恵まれ、国道二十九号線を北上、鳥取県に向った。参加者百五卜余名、九時半頃に浦富海岸に到着、日本海にしては穏かな絶好のコンデションで、二隻の遊覧船に分乗して、奇岩、怪石の豪壮な海岸線を観賞することができた。ついで古来有名な岩井温泉に至り、岩井屋で昼食、入浴して休息。午後は、鳥取市の旧城跡、久松公園を訪ひ、天守跡地から市街を鳥瞰、久松城跡のくずれた石垣をあとにして、樗谷神社に参拝。石畳の参道のすばらしさ、文化財の社殿を充分鑑賞して帰途駅前に小憩、帰着六時頃であった。

雑報

○山崎町花にさつきが選定され、恒例のさつき展が、六月一日二日さつき展示場と下村記念館で開催。観光バス初め、他所からの鑑賞者が押すな押すなの盛況であった。

さつき出品栽培者の受賞は左のとおり

郵政大臣賞ー桷岡定二（山崎）町長賞ー藤村博志（山崎）　商工会長賞ー米沢文太郎（波賀）　神姫社長賞ー谷林照一（鹿沢）　神戸新聞社賞ー森岡繁夫（中比地）

観光協会長賞ー千本清（千本屋）　議会議長賞ー武藤林之助（山崎）

○さつき展と期を同じうして、山崎美術協会では、小学校で美術展覧会を開催。出品者百四十余名、内訳は、書道五十四点、写真二十三点、絵画二十一点、工芸十七点手芸民芸二十七点で、さすが伝統を誇る書道は、優秀であった。

○本会秋季見学旅行は、九月十九日、古都奈良方面に初めての一泊旅行を計画。詳細は別紙御覧下さい。

会員名簿㉗

加藤広治　西町
庄津也子　大才町
森本健一　中広瀬
岡田チヨノ　山田
梅岡喜作　中井
片山わか　金谷

石川友太郎　須賀沢
田中よしの　三津
島津弥一　〃
船谷太助　〃
森上氏　中広瀬